

「めぐみとまことに満ちていた」

イザヤ書 第60章 1節～3節
ヨハネによる福音書 第1章 14節～18節

説教 岡村 恒 牧師師

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(14節)クリスマスの御言葉は、〈一杯に満ちあふれる〉様子を語ります。天には御使いたちの歌声があふれ、この世界に神の恵みと真理とが満ちていたと言うのです。

しかし、クリスマスの出来事は深い暗闇で起こりました。悲しみや絶望が支配し、どこにも光や希望を見いだすことができない世界の姿は、昔も今も変わらないように見えます。しかし聖書は、クリスマス以降世界が変わり、もはや誰も〈この世は闇だ〉などと言うことができなくなった、と声高らかに宣言します。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」というのは、この暗闇の地上に、神の栄光、恵みと真理とに満ちたお方がやって来て、住みついて下さったと言う言葉です。立派な宮殿や神殿ではなく、悲しみが支配している暗闇のまっただ中に、神のひとり子が突入して下さったのです。

洗礼者ヨハネは後に、主イエスを指さして言いました、「見よ、神の小羊だ」(ヨハネによる福音書 1章36節)。ヨハネは、主イエスが一体どなたで、何のために来られたお方を証言しました。すべてのものに満ち満ちたお方が、神の懐を離れて地上に来て下さったのは、私たちの罪を取り除くためでした。そして神の懐には大きな空虚ができたのです。この地上にひとり子を送って、神は大いなる喪失の痛みを味わって下さいました。

神は、私たちが愛して下さったので、この喪失を引き受け、私たちが神のものとして取り戻すために、主イエスを犠牲の小羊としてお与え下さいました。これは、かつて神の民に約束して下さった救いを実現するためでした。暗闇の中、嘆きと流血の地に、神の愛が降ってきたのです。

このお方が来て下さるまで、私たちの世界を満たしていたものは罪でした。嘆きと流血、そして絶望と滅びでした。誰もが、罪の報酬であ

る死と裁きから逃れることができなかったので、この私たちの中に、神のひとり子が来て下さいました。そして、この目に見える世界が、もはや〈闇〉ではなく、神の光が照り輝く世界になりました。

古代の教会は、復活祭の喜びを祝いながら、最初、クリスマスの意味を深く理解できませんでした。しかしやがて、主イエスの降誕という出来事が、神の絶大な愛がこの世界に突入した決定的な出来事であったことを知るようになりました。

クリスマスの出来事を繰り返し思い起こすと、神の愛の大きさ、深さ、長さ、広さを思い知ります。神が私たちが愛して下さったその愛し方に大きな驚きと畏れを覚えます。私たちの救いのために、神ご自身が驚くほどの犠牲を払って下さった。この事実は、私たちすべての者にとって決定的な事件だったのです。

神を信じ、主イエスを救い主として信じる者に、神は永遠の命を与えて下さいます。今日、洗礼を受ける姉妹は、ここで葬られ、新しく生き始めます。あの日、主イエスが地上に降り、罪の赦しの道を開いて下さったので、今日も一人の人が神の民に加えられ、天の食卓の一員となるのです。

やがて終わりの日、神の子とされた者たちは皆、一人残らず神の国の食卓につきます。神のもとに満ちる愛と赦し、恵みと祝福を味わうようになります。主イエスが地上に来て、十字架の上で死んで下さったのは、この満ち満ちる恵みと真理とをこの地上にお示し下さるためでした。

一人の罪人が悔い改めて洗礼を受ける時、天に喜びがあふれます。かつてクリスマスに大いなる喪失を味わった神は、あふれ出る喜びを味わう日を待っておられます。すべての神の子たちが神の国に満ちる日が来るのです。主イエスが再び降って来られる日が必ず来るのです。その日を心待ちにしながら、主の御名を讃美いたしましょう。

(記 岡村 恒)